

2	一宮	中部中学校	ババ ユリカ 馬場 由利加
分科会番号	14	分科会名	特別支援教育

1 研究題目

「自己肯定感を高めるための通級指導」

—読み書き等のつまずきに対する「見る力」を高めるトレーニングの活用を通して—

2 主題設定の理由

LDの生徒のつまずきを把握し、困難さの克服・改善をしていく支援をすることで、自己肯定感を高めさせたいと考える。本研究では、「見る力」に焦点をあてることとする。

「見る力」に焦点をあてる理由は2つある。

1つ目は、学校生活の中で、教師の話聞く以外の場面では、教科書を見る、黒板の字を見るなど視機能を使う場面が大部分であり、「見る力」が低下していると読み書きへのつまずきが起きると考えたからである。

2つ目は、人間の五感の情報収集能力について「産業教育機器システム便覧」によると、「視覚 87.0%、聴覚 7.0%、嗅覚 3.5%、触覚 1.5%、味覚 1.0%」というデータがあり、人間が受け取る情報のほとんどが視覚からの情報であるということから、「見る力」を高めることはLD支援として重要度が高いと判断したからである。

また、「見る力」に関する個人差は視力による違いだけでなく、①目から情報を取り込むための目の機能(入力)、②目から取り込んだ情報を理解する機能(視知覚)、③他の感覚機能や運動機能との連動(出力)など、さまざまな見ることに関係するスキルの強弱によって生じる。本研究では、①～③の能力を「見る力」と定義し、研究を進めることとする。

上記のことを踏まえ、通級による指導においてLD傾向の生徒に対し、「見る力」を高めるトレーニングを取り入れた指導により、読み書き等のつまずきへの改善に取り組むことで、自己肯定感を高めさせたいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究の目標(目指す生徒像)

本校の通級指導教室には、読み書きなどの学習でのつまずきにより自信や居場所を失い、自分を肯定的に受けとめることができなくなっている生徒や、学級担任や教科担任にうまく自分の気持ちを伝えることができず助けを求めることが難しい生徒など、学習以外の生活の場でも何らかの困り感を抱えている生徒が在籍している。

これらの生徒の実態を踏まえて、ビジョントレーニングや自立活動を通して、「見る力」を育て、自己肯定感を高めさせたいと考え、本研究で目指す生徒像を次のⅠとⅡのように設定した。

- | |
|--|
| Ⅰ 「見る力」の低下により起こる、学習上又は生活上の困難さを主体的に克服・改善できる生徒 |
| Ⅱ 自己肯定感を高め、さまざまな活動に意欲的に取り組むことができる生徒 |

4 研究の仮説(実践の見通し)

つまずきのある生徒が、学習や生活の中で必要とされる「見る力」を効率よく高めていくことができるようになれば、読み書き等学習における負担が軽減され、学習や活動に意欲的に取り組むことができるようになると考えた。

第一に、目と脳の連携が滞ると、文章を円滑に目で追えない、文字の形や方向を正しく認識できない等の弊害がおこりうる。

第二に、目から得た情報をアウトプットする力が必要である。ここでいう「アウトプット」とは、処理された視覚

情報をもとに体を動かすことである。それがスムーズに行えるようになれば、文字のバランスが整う、運筆が滑らかに行えるようになる、定規やハサミなどの道具を円滑に使用することができるなど、学習に必要な手先の巧緻性が高まると考える。

また、通級による指導では、積極的に自立活動も取り入れ、学習上又は生活上の困難さを改善・克服し、心身の調和的発達の基盤を培うことが重要であると考え。それらを踏まえ、本研究の仮説を次のように設定した。

【仮説A】目指す生徒像Ⅰに対して

通級指導において、効果的な「見る力」を高めるトレーニングを継続的に実践すれば、「眼球運動能力」「視空間認知能力」「目と手の協応能率」が高まり、学習上又は生活上の困難さを主体的に改善・克服できるであろう。

【仮説B】目指す生徒像Ⅱに対して

通級指導において、自立活動で体験活動を積み重ねれば、さまざまな活動に意欲的に取り組むために必要なソーシャルスキルが定着し、自己肯定感が高まらるだろう。

5 研究計画・研究方法

(1) 研究対象 生徒 A(中2、女子生徒、週3回通級)

(2) 研究計画・研究方法

目指す生徒像に迫るために、以下のような具体的な手立てを考えた。

仮説Aに対する手立て

手立て1 WAVES「見る力」を育てるビジョン・アセスメントを活用し、生徒の実態把握を行う。

手立て2 生徒の実態を基に、「見る力」を高めるトレーニングを精選し、継続的に実施する。

仮説Bに対する手立て

手立て3 自立活動において「安心感をもつ過程」「できたことを実感する過程」の場を設定し、自分を肯定的に受け止めさせる。

<手立て1について>

年度当初に、「WAVES『見る力』を育てるビジョン・アセスメント」を実施し、生徒の「見る力」の実態把握を行う(資料1)。学習や生活の場面において、「見る力」の定義①～③のどの部分に弱さが見られるのか把握することができる。

<手立て2について>

手立て1より得られた生徒の実態把握を基に、個に応じた有効なトレーニングを精選し、本人のつまずきに寄り添った指導を計画し、実施する。

<手立て3について>

生徒の実態に合わせた自立活動を組み入れる。「安心感をもつ過程」では、生徒を受容的・共感的に受け止め、共に活動を行いながら、生徒が自分の気持ちを素直に表したり、自分の長所に気付いたりすることができるようにする。

また、「できたことを実感する過程」では、毎時間、本人と指導者で活動を振り返り、自分の行動や言動を客観的に捉えることで、自分の良さを認め、自分ができるようになったことや課題について気付くことができるように促す。

(3) 仮説に対する検証方法



(資料1) WAVES

3学期にWAVESを再度実施し、「見る力」トレーニングの効果を比較し検証する。また、定期テスト、授業ノートや提出物などの記述内容や文字、通級や通常学級での人との関わりの様子などから、生徒の能力や意識の変容を捉え、仮説の有効性を検証する。

6 研究の実際

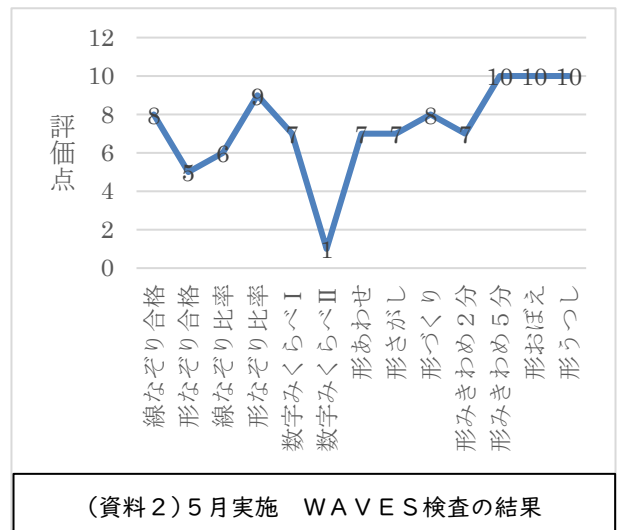
(1) 生徒の実態

生徒Aは、常に自信がなさそうにしており、目を合わせての会話が難しく、不安げな表情で落ち着かない生徒である。また、制服のリボンがほどけていたり、束ねた髪の毛が乱れていたり、制服に食べかすがついていたりするなど、身だしなみの不備が目立つ生徒である。また、学校で教科書などを音読する時に、読み方がたどたどしかったり、何度も読み直したりして、時間がかかる。眼球運動において視線がとんだりはねたりすることも顕著である。通級による指導の初日に、「自分の長所はどんなところ?」と尋ねると「長所はない。何もいいところなんてない」と発言するなど、自己肯定感の低さがみられた。

(2) 手立ての具体的な実践

<手立て1>

5月に実施したWAVESでは右のグラフのような結果となった(資料2)。「数字みくらべⅡ」の大きな成績低下に伴い、評価点の差が大きい。「数字みくらべⅠ」の評価点が7、「数字みくらべⅡ」の評価点が1であったことから、対象に意識を向け、視線を移動させる視覚的注意と、眼球運動の速度と正確性に課題があることが分かる。このようなグラフから、視覚に関する処理速度が若干低下していることと、視線を正確にすばやく移動する力に弱さがあると予想することができた。



<手立て2>

手立て1の実態把握をもとに、5月から生徒Aへのトレーニングを開始した。WAVESの結果の解釈を踏まえ、注意してものを見比べる活動、跳躍性眼球運動や追従性眼球運動などの眼球運動を取り入れた。「両目の眼球運動」を高めるトレーニングに少しだけ比重を置きつつも、なるべく「入力」「視覚」「出力」を網羅できるように1回のトレーニングに5つのトレーニングメニューを組み合わせ、20分程度で終わるように計画をし、実践した。扱う内容によっては、「初級」「中級」「上級」とレベルに合わせて取り組ませるようにした。

① ナンバージャンプ(資料3)

方法 番号のかかれた枠をもち、指定された番号を順番に目で追う。

留意点 頭を動かすのではなく、目だけを動かして全体を見るように指示する。

生徒の様子 最初は、枠ではなく方眼紙をもって行った

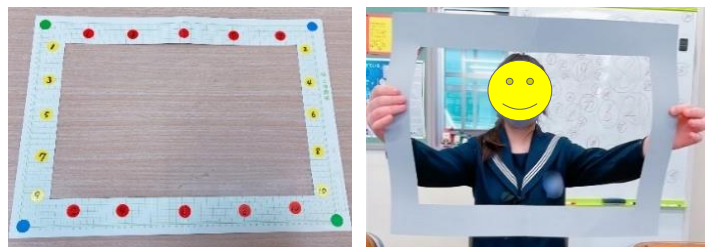
が、頭が動いてしまうため、中を切り抜いて枠にした。それにより、指導者が顔の向きを目視しながら行わせることができ、生徒は目だけを動かすことを意識して行えるようになった。

② ランダム読み(I:文字の間があいていないもの II:文字の間があいているもの(資料4))

方法 声に出して数字・文字を読む。

(初級) 指で行をなぞりながら読む。

(中級) 行に定規をあてて読む。



(資料3) 左：ナンバージャンプ教具、右：トレーニングの様子

(上級)目だけで行を追って読む。

留意点顔(視線や頭)を動かさないように指示する。

③ 数字探し(資料5)

(初級)A4のプリントで行う。

(中級)数字の向きや大きさが不規則に点在しているプリントで行う。

(上級)ホワイトボードに書かれたもので行う。

留意点頭を動かすのではなく、目だけを動かして全体をみるように指示する。

生徒の様子上級のホワイトボードでの数字探しになると、目を動かしながら数字を探し、探しだすとホワイトボードの隅のほうまでチェックをしに行く。眼球運動と同時に、目と手の協応としても活用することができていた。

④ お手玉キャッチ(資料6)

方法お手玉を片手で投げて反対側の手でキャッチする。

(初級)利き手で投げる。

(中級)利き手の逆で投げる。

(上級)交互に投げる。

生徒の様子最初は、力加減をコントロールできずに、手の届かない前方に投げてしまうこともあったが、トレーニングを継続すると、両手で交互に投げてキャッチすることができる回数が増えた。

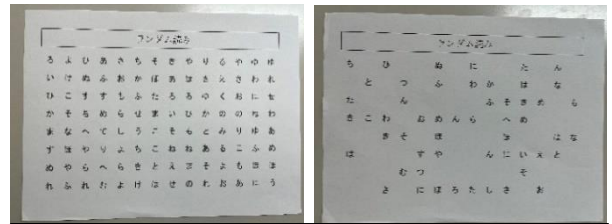
<手立て3>

生徒Aの実態から、自立活動として、「身だしなみを整える」ことを中心に取り組んだ。だらしない姿は、同年代から浮いた存在として認識されてしまい、それが教室での孤立傾向につながっていると考えられた。生徒Aと関わる中で、身だしなみを「整えない」のではなく、「整えられない」ということを感じた。「見る力」トレーニングで、「出力」部分を強化し手先の巧緻性を高めることができれば、それがリボン結びやくしや箸のスムーズな扱いにつながると予想した。自立活動で取り入れた個に応じた活動として実践した例を2つ挙げる。

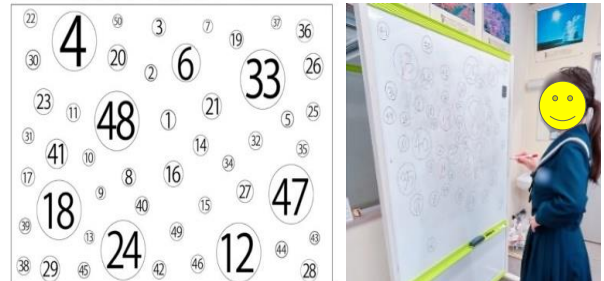
1. 髪の毛のセット

経緯髪の毛の長さは肩より20センチほど長く、頭部でひとつに束ねているが、髪の毛の流れが乱れていて、表面も凸凹している結び方であった。(資料7)

生徒の様子くしの使い方をみても、髪の毛の生え際を無視して、左右前後に規則性なく動かしてしまい、髪の毛の流れがぐちゃぐちゃになってしまっていた。くしをいれる場所と、くしを動かす流れを絵にかいて説明をした。絵を自分と見立てて、くしの動く流れを指さし確認をして練習し、実際に鏡を見ながらくしで髪をとく練習を行った。次に、髪を後ろに束ねゴムで結ぶ練習を行ったが、鏡にうつらない後頭部で、ゴムを結ぶ手先の動作は難しいようで、何度やっても、くしで束ねた髪がいつの間にか乱れてしまう状態が続いた。そこで、フェイスタオルを用意し、まずは、ヘアゴムでタオルを束ねる練習から始めた。する



(資料4) 左:ランダム読み I、右:ランダム読み II



(資料5) 左:初級プリント 右:上級の様子



(資料6)

お手玉キャッチの様子



(資料7) 5月の髪型



(資料8) 1月の髪型

と、ゴムを動かす手先のイメージが視覚化され、反復練習によりとてもスムーズに指先を使えるようになった。

成果半年ほどで「髪をとかす」「髪をたばねる」「髪を結ぶ」というステップがひとつずつできるようになった(資料8)。

2. 正しい箸の持ち方

経緯箸がうまく使えずに、給食時制服に食べこぼしが目立つという指摘を学級担任から聞いていたため取り入れた。給食で使う箸と同じものを使用して、箸トレーニングを行った(資料9)。

生徒の様子最初は、二本の箸をグーの手で二本一緒に握って、食べ物をつかむというよりはすくうような持ち方をしていた。正しい箸の持ち方の手本を見せても、すぐには指の使い方や箸に指を添える場所をうまく真似することができなかつた。

支援の工夫・留意点正しい箸の持ち方が視覚イメージとして残るよう、図を示して指導した。さまざまな食材を想定して形や大きさの異なるボタンを利用し、箱から箱へ箸でつまんで移動させる練習を繰り返した。その都度、タイマーでかかった時間を計測し、「前回までの自分より成長できたか」を意識させた。

成果ボタンうつしを始めたときは、5分56秒の時間を使ってすべてのボタンを移動させたが、1か月ほど練習を続けると、こつをつかみ箸裁きが軽快になった。計測タイムも2か月ほど経つと、毎回2分台でスムーズに行うことができた。「前、自分がどんな持ち方をしていたのか思い出せないくらい正しい持ち方に慣れました」という言葉からも、「できなかった」ことが「できた」という目に見える成功体験につながったと感じる。

(3) 研究の成果

仮説Aに対して

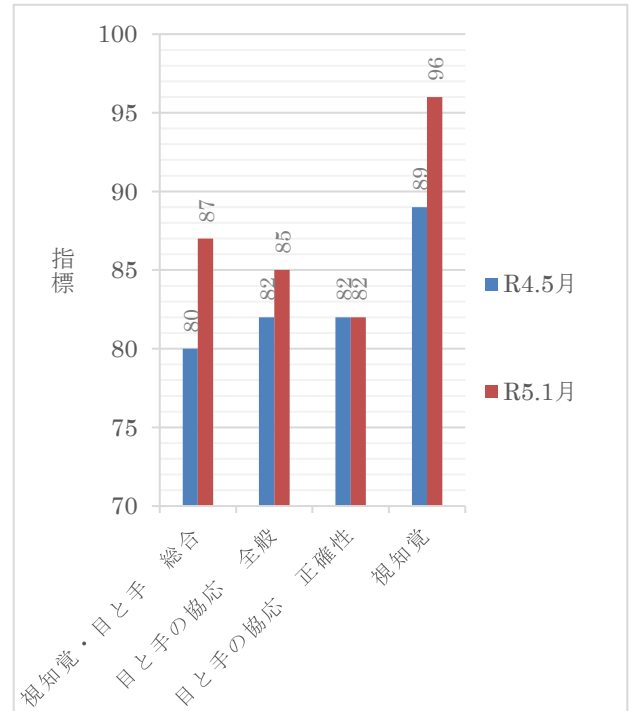
上記の実践による成果を検証するため、1月にWAVESを再実施し、指導前の5月のデータを「視知覚・目と手 総合」「目と手の協応 全般」「目と手の協応 正確性」「視知覚」の指標で表した資料10と、下位検査を評価点で表した資料11と二つの結果をもとに比較した。

資料10から、指導後においては、「視知覚・目と手 総合」「目と手の協応 全般」「視知覚」の三つの指数が、指導前よりも高い数値がでていくことがわかる。一番数値が増加している「視知覚」については、89ポイントから96ポイントまで7ポイントの増加がみられた。

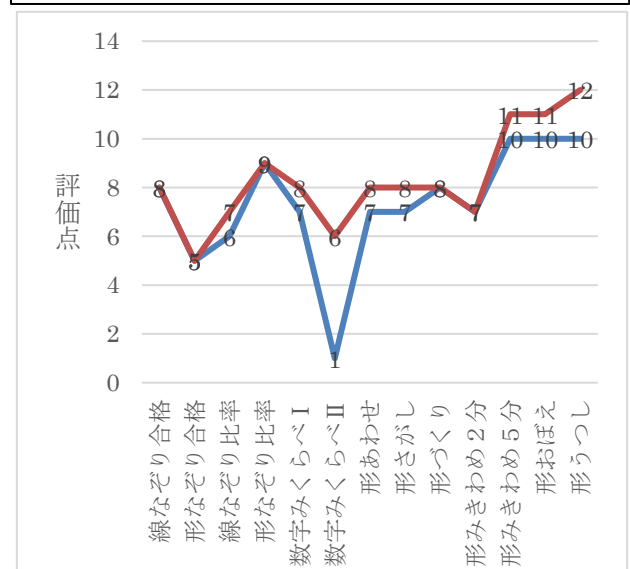
また、資料11において、特に重点を置き取り組んだ「両目の眼球運動」を高めるトレーニングの部分である、「数字みくらべⅠ」と「数字みくらべⅡ」の評価点を見てみると、指導前と指導後ではどちらも評価があがって



(資料9) 箸トレーニングの様子



(資料10) WAVES指数の変化(5月・1月)



(資料11) WAVES検査の変化(5月・1月)

いることがわかる。「数字みくらべⅡ」に関して、評価点 1 から評価点 6 にあがり、5 点伸びていることから、「見る力」のトレーニングの成果を実証することができた。実際の様子からも、ナンバージャンプでは、次第に滑らかな眼球運動ができるようになり、頭を動かすことなく眼球だけを動かせるようになった。ランダム音読においても、縦読み、横読みのタイムが平均的に 3 秒速くなった。また、横読みのトレーニングにおいては、行をとばさずに音読することができるようになった。この結果から、「見る力」を高めるトレーニングを行ったことにより、目が以前よりスムーズに素早く動くようになってきていることがわかる。

仮説Bに対して

生徒Aの実態より、「身だしなみを整える」ことを目標に掲げ、継続的に活動に取り組んだ結果、「身だしなみを整えなければならない」という意識付けにつながった。さらに、関わりのある教師らに取り組みを伝え注視して肯定的な声をかけてもらうよう呼び掛けたことにより、「見られている」「褒められてうれしい」という感情が高まった。入級するなり、「頭の後ろ、グシャってなってないですか？」と気にする姿がみられるようになり、次第に「身だしなみを整えたい」という意識の変化がみられた。

学級での様子を観察すると、通級による指導の時間と比較してやや消極的な様子がみられるが、そのことに関して「クラスで勉強していると、周囲が気になってしまうんだよね」と自己理解ができるようになっていた。また、初対面の時に長所を尋ねると「自分に長所はない」と答えていたが、12 月に尋ねた際には「絵をかくことが得意だし、妹の面倒をよくみるよ」「短時間なら、すごく集中できるようになった」と答えが返ってきた。

このようにして生徒Aのつまずきに応じて「見る力」を高めるトレーニングや自立活動に取り組むことにより、「できない」が「できる」に変えられると自分自身で実感でき、苦手な内容を克服したいと前向きに取り組む姿勢が学習や生活の場で顕著に表れるようになった。以前は、「自分はだめだ」と思い込んでいた原因を視覚機能の問題だったと自己理解することで、学習や活動に自信をもって取り組み、集中力を発揮できるようになるなど、生徒Aの自己肯定感が向上する姿を検証することができた。

7 研究の成果

今回の研究では、生徒の実態に応じて「見る力」を高めるトレーニングを計画し、具体的な実践を行ったことにより、WAVESの数値として、「見る力」が高まったことを立証できた。「見る力」を高めるトレーニングや自立活動の中で、生徒が興味のあるゲーム的な要素を取り入れた体験的な活動や、個の実態に合った進め方、教材や教具などを工夫することによって、学習上又は生活上の困難さを改善・克服するために必要な「眼球運動能力」「視空間認知能力」「目と手の協応能率」を高めることができた。また、それらの活動の中で、「できない」が「できる」に変えられると自分自身で実感でき、苦手な内容を克服したいと前向きに取り組む姿勢が学習や生活の場で顕著に表れるようになった。「できない」を「できる」に変える力があると気づかせる経験を重ねたことで、自立や自己肯定感の向上につなげることができた。

8 今後の課題

生徒に関する情報交換を密に行い、指導者側が共通理解をしておくことが大切であるが、現在は学級担任との通級記録のファイルと口頭での情報交換のみで、他の教科の先生などに支援を促す時間を多くもつことができていない。今後は、学級担任と通級指導担当者が連携を図り、生徒の具体的な合理的配慮を検討し、個別の指導計画に位置付けていくことが課題である。そして、「見る力」だけではなく、困難さをもつ生徒の取り巻く環境を合理的に整えることなどにおいても支援をすすめ、生徒自身の自己肯定感の高まりにつながる取り組みを続けていきたい。